

# イラン通信

末尾至行

第一信 (昭和四十七年四月十八日付)

日本學術振興會が運営する「西アジア地域研究センター」Japan Institute for Persian and West-Asian Studies に一年間駐在することを委嘱され、大学当局や史学科諸先生方、教授会の御承認をえて日本を離れ、ここイランの首都テヘランの地については十日余りが経ちました。

テヘランは幸いにも、十三年前と八年前にしばらく暮っていた懐かしい土地です。通りの名前やレストランの所在や街のたまたまいなどは、いずれも以前と全く同じで、迷うことなく身を処していますが、ただ市街地が大きくなったのと、人と車が増えているのには驚かされました。かつて閑静だった新市街地にも、人と車があふれるほどで、しかも交通法規もマナーも守られておらず、ややうろたえています。たとえば、ゴーストトップの信号は車だけのため、歩行者は赤信号で横断してもよいらしく、警官は絶対にこれをとがめた

てしません。「センター」に車が常備されるというので、せっかく手にしてきた国際免許証も、たとえ右のような歩行者相手に人身事故をおこしても運転者側の過失となりますから、こわくてとても活用できる見通しにありません。相手が外国人であれば法外な補償金を要求してくるといいますから、補償金が支払えず、一生イランから足を抜けなくなっても大変だと思えます。

この「センター」というのは、ヨーロッパの洋服地などを扱うさる大商人が経営する四階建のアパートの三階にあります。日本流に言えば4LDKというのでしょうか。しかし個々の部屋はずつと広くて快適です。いわゆる職住一致もいところで、住居即オフィスですから、最低は毎日戸外に出ずに過ごせばいいわけです。例年駐在員はひとりずつです。すから、この広いスペースに身を置いていまして、小生などつい金持になったような気持ちになります。なぜこのような「センター」が設置されたかということですが、『日本學術振興會概要』によりますと、西アジアは日本からする各種の學術調査の興味ある対象地域になっているので、テヘランを選んで「この地に研究者を派遣して、この地域の長期的な

調査研究を行なうとともに、地域研究専門家の養成に資し、あわせてこの地方の調査を行なうわが国の調査団・研究者に便宜を供与し支援協力を行なうものである」となっています。要するに、こちらで勉強もさせてもらえませんが、同時に日本からくる研究者や調査隊のお世話もしなければならぬわけです。小生の能力・素質からすれば、前の方も後の方もともに不向きですが、しかしせっかく選ばれたからには、孤軍奮闘がんばらざるをえませんが、それにしても、ひとりだけというのはいささか心寂しいです。昨日もテヘラン大学へ出向いて文学部長のナスル教授に会いましたが、「あなたが研究センターのヘッドか？」ときかれ、「ヘッドもヘッド、ひとりだけです」と答えざるをえませんでした。一日目同じくテヘランにある British Institute of Persian Studies から、スライド付の「北西イランにおけるアッシリア人」という講演の案内をうけましたが、数名のスタッフを擁し、多くの蔵書を持ち、研究活動も活発に行なっている先方に比較して、当方は格段の見劣りがしていささか恥しいです。もちろん、両国の研究歴のへだたりもありましようが、しかし日本にも多くの西アジア研究者もおら

れることだし、日本政府もこのような「セクター」の拡充にもっと金をかけてくれたらとつい力んでしまいます。

それはともかく、この一年間をどのように過ごそうかと思索しましたが、せっかく与えられた機会であるし、まずペルシア語をマスターしようと思しました。幸にデガン君という大変教え方の上手な先生を得まして、一日置きに夜一時間余りの特訓をうけています。一日置きとはいえ、予習、復習にあいだの日もほとんど完全にふさがってしまうほどのきびしさです。日本で習うのと違ってこちらも必死ですから、身につくことも早いことでしょう。「セクター」の前任者との引継ぎがすんでテヘラン空港へ見送ったあと、ひとりになった当座は、日本語が通用しない世界に置かれてどうしようかと不安でしたが、この頃は、出来るだけ早く日本語を忘れ去ろうと努力しています。もちろん、在留日本人の方々との交渉もありますから、それは不可能なことですが、有体にいえば右のような気持ちになっています。この「セクター」に助手のようなかたちでいてくれるフルタン君も、当方の意図にあわせて会話を次第に英語からペルシア語に比重をかけてくるようになりました。

その上に、毎日々々、今日は気象用語、今日は農業用語といった風に、単語を類別してたたきこんでくれるので大助かりです。

### 第二信（昭和四十七年六月六日付）

テヘラン到着後、丁度二カ月目の朝を迎えました。例年になく気候不順で、冬の大雪の雪だけによる大洪水や春嵐による農作物の被害、鉄道・道路の不通などの情報がしばしば報じられた二カ月間だったので、四、五日来ようやくからつとした乾燥地特有の夏の前兆を感じはじめようになりました。春分の日を一月一日とし、一年の十二カ月は春夏秋冬に三カ月ずつきっちり割り振ったイラン固有の暦では、この六月二十二日からがいよいよ夏です。

テヘランでは、夏は雲一つない快晴が続きます。日本では晩夏の風物である入道雲も、すでに春先に数日間姿をみせたきり、もはやその影形もありません。茸類も春雷とともに地上にわき出るといいます。ある地方で毒茸による多数の中毒死が報じられていました。茸のシーズンもすでに終ってしまいました。何か季節感の狂うような話ばかりですが、しかし野菜・果物の類は、日本と同じリズムをもっているようです。果物についてい

えば、オレンジにつづいて今はイチゴ、サクランボ、スモモの出盛り期ですが、そろそろメロン、スイカも出まわりはじめました。

食物の話のついでに、テヘランに来て面喰ったことの一つは、羊の肉があまり食べられなくなっていることです。以前散々悩まされたチェロキヤバブという羊肉料理も、案外すいすいと喉を通るのでよろこんでいたら、材料は牛肉だろうという話です。十三年前などは、ビフテキなどほとんど口にすることのできなかつたのですが、今やビフテキ屋が登場するかわら牛肉がチェロキヤバブのようなイランの国民料理の中にまで羊肉をおしつけて幅をきかしているわけです。この理由はイラン人の嗜好の変化にあるのではなく、むしろ数年来の旱魃にあります。牧草の欠乏から羊がどんどん処分され、肉の供給源がたたれかけているというわけです。羊の輸入なども盛んに論議されていますが、今年の水過剰は、洪水の被害などがあつたものの、家畜経済をもふくめ豊年の前兆としてよろこばれています。かくして、チェロキヤバブにも羊肉が復活することでしょう。しかし、牛肉料理もこのままイラン人の間に定着するであろうというのが、小生の希望的観測です。レスト

ランで観察していても、牛の舌料理など、よくくうけているようです。ただし料理は荒っぽく、この間も牛の舌を食べていて固いものにゆきあたり、舌に骨はないはずだととり出ししてみると、数本の牛の歯でした。舌とともにどうやら顎肉までが調理されているらしい。思わず吹き出してしまいました。

この二カ月間は、テヘランに滞在したまま相変らずペルシア語の勉強に精出しながら過ぎてきました。多少は口がなめらかになってきたといえるのでしょうか。テヘランの郊外に出かけたのは、フルタン君の案内で、じゅうたん洗濯業者が使っているので有名なレイというところの「アリーの泉」と、ヴァラミン村のカナート掘りの現場を見学に行ったことです。「アリーの泉」には十三年前はかわらに茶店があり、じゅうたんをごしごしやっているその泉の水で茶をわかしていたものですが、さすがになくなっていました。カナートは本学の織田武雄先生の御研究分野ですが、横穴の補強に時々用いられる土管が、かつての粘土の素焼からコンクリート製に一変しているのにも驚かされました。

七月には、イラン東南部のシースタン地方への旅行を計画しています。中世アラビアの

地理書にも述べられている風車が、現在も機能果しているというので、ぜひとも確認したいわけです。暑さは大変なものだと覚悟しています。

◆福尾猛市郎教授 本年四月から日本史の専任教授として福尾先生をお迎えすることになった。先生は、兵庫県三田市出身、昭和七年京都大学国史卒、本学講師、文部省編修官、山口大学教授、広島大学教授を経て来任された。社会史や文化史に幅広い造詣を持つ学界の泰斗で、特に古代では村落史や身分制度、中世では武士社会の構成や宗教史、近世では寺内町や交通史・宗教史のすぐれた業績が多い。若くして手がけられた『滋賀県八幡町史』三巻（昭15、復刻昭45）は戦前における地方史中の白眉として名高く、『大津市史』（昭17）、『日本家族制度史』（昭23）、『山口県文化史』（昭26）、『貝塚市史概説』（昭28）、『大内義隆』（人物叢書、昭34）、『京・鎌倉』（国民の歴史8、昭43）等々著書多数。本年二月刊の『日本家族制度史概説』はこの分野唯一の良書としてはまれが高い。昭和三十七年「近世近江商人の活動に関する研究」で文学博士号を授与。現在、日本歴史学協会委員、広島市

史、広島県史編纂委員等。

◆大庭脩教授は、昭和四十七年度関西大学在外研究調査員として、澳代木簡の研究などのため、三月三十日伊丹を発ち、英・仏・独・スペイン・オランダ・スエーデン・デンマーク・アメリカ・オーストラリアなどの諸国をまわって、十月一日に帰国。

◆網干善教助教授は、七月九〜十八日の間、関大校友会韓国古代文化視察団の指導と韓国壁画古墳の調査のため、ソウル・水原・公州・扶余・慶州・釜山の各地をまわり、ソウルでは、高松塚発掘調査の韓国における最初の発表講演（ソウル大学主催）を行なった。

## 史 泉 第四十五号

五百円（千30円）

昭和四十七年九月三十日発行

大阪府吹田市千里山

編集兼 発行所 関西大学史学会

振替大阪二六〇一六番

代表者 原 弘二郎

印刷所 大宝贝印刷株式会社